
虹のふ化

有里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹のふ化

【Nコード】

N0019Y

【作者名】

有里

【あらすじ】

サイトより転載。

何年何十年かかるか分からないけれど、いつか、こうして俺たちが
思い描くような生活が、手に入ればいい。……社会人夫婦のお話。

「自宅から、何か重いものがぶつかるとような音やソウタ君の泣き声などがしていたことが24日、近所の住民への取材で分かりました。署はソウタ君が暴行後しばらく放置されたり、断続的に暴行を受けていた疑いがあると ……」

台所で食器を洗っていると、リビングの方からアナウンサーの硬い声が聞こえた。

小学1年生になる息子が、母親の交際相手にしつけと称した虐待を受けて死亡した事件のことだ。

子供が犠牲になる事件ほど、切ないものはない。けれど、都会でも田舎でもどこでだって、こういう事件は絶えず起きています。こんなにも報道されているのに、なくならない。いや、報道されるのはほんの一部だけだ。みんなの知らないところで、日常的にこういう問題は起きている。

「つまり、虐待されてるんじゃないかと思われる子供がいたのなら、それがまだ【疑い】の状態でも、通報して下さいということですよ。児童虐待防止法の改正で、児童虐待を発見した場合の通告義務から、 ……」

番組ではコメンテーターの男が、児童の異変に気づくのが遅かった児相や小学校教員の対応を非難するようなことを言って、何やら知ったようにコメントしてるけど、それよりも俺は、春樹の、憤りしか含んでいない声に心を震わされた。

「子供を殴って蹴飛ばして、そうすりゃどうなるかくらい分かるだろっがよ…!」

テレビの真正面にあるソファーに座ったまま、誰に言うでもなく怒鳴り声を上げた春樹は、物凄く怒っている。そして、物凄く悲しんでいる。見ず知らずの、自分とは何の関わりのない子供でも。親になるはずの人間に殺されてしまったなんて、ひど過ぎる。しかもそれが、食べ方が汚いだとか行儀が悪いだとか、しつけのつもりで叩いたなんて子供を言い訳にしてる下らない親に。悔しい。

「…ったく、この女も、ろくでもねえな。…」

我が子を守らない母親が、どこにいる。母親が男を庇うのは、何の感情だろうか。その愛情を、息子にはかけてやらなかったのか。怒りと悲しみと、それを通り越したって、そこにはまた新たな悲しみがあるだけ。

「こいつら、親になる資格もねえ…!」

震える声に、春樹が何を考えているのか、分かる。

俺たちがどんなに子供が好きで、好きで、どんなに欲しいと願っても、どんなに親になりたいと願っても、出来ないんだものね。世間は、俺たちのことを認めはしない。それなのに、玩具を扱うよう

に子供を傷付ける人間たちを、親と認めるんだから。

春樹が、何を考えているのか、俺は痛いくらい、分かる。

うん、でもね春樹、虐待をしてしまう親ってというのは、その人自身も虐待されていたり、愛情が十分に貰えなかった人が多くて、愛情には暴力が付き物なんだって、間違った認識をしてしまっている人が多いんだよ。そういう人たちは、本当の愛し方を知らない人たちなんだ。

子供に手を上げてしまって、死ぬほど後悔して、罪悪感に押し潰されそうになりながら、それでも子供を愛そうとして、愛し方が分からなくて、自分がどんな風に育てられたか思い出そうとしても分からなくて、分からなくて、苦しんでいる人たちなんだ
…
気が遠くなるくらい、俺は、そういう人を、よく知っている。

蛇口を閉めて手を拭きながら、エプロンを脱ぎ捨て、春樹の後ろからテレビを見る。ニュース番組はもう違う画面に変わっていて、女の人が好きそうな、ストールを使った「大人かわいい、秋のモテコーデイナー」の特集に移っていた。春樹はリモコンを取って、テレビを消した。ぶつん、と音を立てたテレビの黒い大きな液晶に、儼然とした春樹の顔と、その後ろに立つ俺の姿が映っている。

「俺たちは、子供が欲しくても、叶わないってのに……」

俯いた春樹の黒い頭は、何だか寂しそう。春樹、子供、好きだもんなあ。

幼稚園でも、優しくて頼りになる、かっこいいイケメンの春樹先生なんだもんなあ。

俺は先生としてのお前を知らないのに、それなのに、子供たちはそれを知っていると思うと、ちょっとずるいなあって、思うよ。先

生のお前は、どんな顔をしてるんだろう。

でも、お前が子供たちを愛してるのは分かる。それにも少しだけ嫉妬を感じるけれど、お前が子供たちを愛するだけ、同じだけ、お前だってみんなに愛されてるよ。子供は自分を心底愛してくれる大人をよく知っているから。何があっても自分の味方で、守ってくれる大人をよく知っているから。

そう思えば、ニュースに出てきた悲しい事件の子供も、近所の公園で元気よく遊んでいる子供も、みんなみんな、愛おしい、俺たちの子供だ。母親に愛されてる子供もそうでない子供も、みんなみんな、俺たちには大切な子供だ。例え血の繋がりが無くたって、例えお腹を痛めて産んだ子供じゃなくたって、大人には、子供たちを見守って、育てていく義務があると思うから。

それに、例え見えず知らずの、自分とは何の関わりのない子供でも、これから沢山あるはずの人生の楽しみを知らずに、傷付いて死んでしまうのは、悲しい。理不尽に命を奪われて、死んでしまうのは、悲しい。なあ、春樹先生。大人になってからの方が、ずっと楽しいことがいっぱいあるんだ。誰かと恋に落ちて、誰かと愛し合って、誰かと……。独りきりじゃ、決して感じることの出来ない幸せが、必ずあるから。子供たちには、それを知って欲しい。全てを擲ってでも、誰かを心の底から信頼する素晴らしさを、知って欲しい。俺はそう思うよ。お前だって、きっと、そう思ってる。

目の前にある日に焼けた頂が、とつても愛おしい。そう思ったら急に涙が出そうになって、俺はソファアの背凭れ越しに、春樹の首に腕を回した。

「なあ春樹、」

ぎゅ、と抱き締めて、親しみを込めて名前を呼ぶ。顔を傾けて頬を寄せた春樹に、俺もそつと頬を寄せる。春樹の大きな骨張った手が、優しく、俺の腕に触れた。

「春樹、」

いつかさ、海が見える高台にさ、小さくてもいいから、俺たちだけの家を建てて、そこで、沢山の子供たちと暮らしたいな

…そこにくる子供たちは、多分、とても傷付いていて生きることには疲れ果てていて、心が凍り付いて、大人を信用出来なくなっているかもしれないけれど、それでも、お前と俺の子供だと思えば、どんな子供でも大切に、大切に、心底愛おしいと思うよ。

もし、子供たちにどんなに拒絶されたって、俺たちは彼らの不安を理解しようとして、両手を広げて待ち続けるだろう。そして、お前は愛情を持って、優しさと厳しさを教えるだろう。俺は、そんなお前と子供たちを見ながら、きつと、奇跡のようなめぐり合わせを、仕合わせを、噛み締めてる。

いつか、なんて、夢のようだけれど、俺は本気で、それを夢見てる。

「…幸弥、…」

腕の中で、春樹が身じろぐ。心地良い声が、低く、直接肌に響く。

「なに、春樹？」

春樹の黒い目は、透き通っていて、綺麗だ。春樹は俺を斜めに見上げて、そっと笑う。

「俺、お前のそういうところ、好き。幸弥はいつだって、俺の味方でいてくれる。」

春樹が真面目に言うものだから、俺は笑ってしまった。だって、当然だろう？ そんな風に春樹の目を見詰めれば、春樹はだよなあ、と頷くように目を細めた。

「俺だって、お前のそういうところ、好き。」

案外子供染みたところがあって、本当は涙脆くて、純真で優しい心を持っている、春樹が。そして何より、それを俺が誰よりも誰よりも、よく、知っているから。

「なあ、俺、仕事頑張るからさ、」

何年何十年かかるか分からないけれど、いつか、こうして俺たちが思い描くような生活が、手に入ればいい。それまで、どうか、俺たちの子供たちが、安らかに、温かく、些細な幸せでも幸せと感じられるように。

春樹の手が、頬を撫でる。かさかさして固い指だけど、俺は春樹のこの大きな手が好きだ。こっちを振り向いた春樹に、そっと首を伸ばしてキスをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0019y/>

虹のふ化

2011年11月12日15時28分発行